

小児看護学実習（保育所実習）における「絵本の読み聞かせ」に関する学生の学び

網野裕子¹⁾，沖本克子¹⁾

1) 保健福祉学部看護学科

本研究は、本学の小児看護学実習（保育所実習）で導入している「絵本の読み聞かせ」後の記録を質的帰納的に分析することにより、「絵本の読み聞かせ」における学生の学びを明らかにし、学習方法の意義を検討することを目的とした。発達段階を考慮して、3歳未満の子どものクラスを受け持った学生と3歳以上の子どもをクラスを受け持った学生で区分し分析を行ったが、【読み聞かせ成功の要因】【捉えた子どもの反応】【より良い読み聞かせに向けて】の3カテゴリーが共通して抽出された。これらの結果より、学生は「絵本の読み聞かせ」を通して、難しさを感じながらも読み聞かせが成功したと捉えていること、読み聞かせを行いながら子どもの反応をしっかりと捉えていること、子どもの特性に応じた読み聞かせを行うにはどうすれば良いかを考察していることが明らかになった。

キーワード：絵本の読み聞かせ，小児看護学実習，保育所実習，看護学生，学び

I. はじめに

近年、少子化・核家族化により、日常生活の中で直接的に子どもと触れ合う体験が少なくなっている。中嶋らは、子どもとの接触体験の多さが小児看護学初学者の子どものイメージ形成につながり子どもの理解に影響すると報告している（中嶋他，2005）。本学で小児病棟での2週間の実習期間中に受け持つ子どもは学生1名につき1～3名程度である。子どもを対象とした看護を展開するためには、健康障害及び入院が子どもに及ぼす影響を理解することが必要であり、そのためには、子どもの理解を深めることが不可欠である。そこで、本学では、「子どもの身体的・心理社会的発達の実際を知り、健全な成長発達を促進するための基本的技術を学ぶ」ことをねらいとし、小児看護学実習の中に保育所実習を取り入れている。その中で、子どもとのかかわり方を学び、子どもの理解をより深める機会とすることを目

的に、平成28年度から受け持ちクラスの子どもたち全員を対象に実施する「絵本の読み聞かせ」を導入した。絵本の選択は主として学生自身が行い、受け持ちクラスの子どもたちに対して絵本の読み聞かせを行っている。

絵本の読み聞かせを小児看護技術演習に取り入れた大沢は、絵本の読み聞かせは「子どもと接する体験の少ない学生にとって子どもにどのように向かい合うかを考える機会となり、子どもを理解する糸口として有効である」と報告している（大沢，2006）。また、小児保健の授業に看護学生の絵本作りと自作絵本の読み聞かせを取り入れた原嶋らは、絵本の読み聞かせは「子どもの特性を理解する機会となっている」と報告している（原嶋他，2005）。小児看護学実習（保育所実習）における「絵本の読み聞かせ」も同様に、学生の子どもの理解に繋がっているのではないかと考えるが、検証はされて

いない。そこで本研究では、「絵本の読み聞かせ」後の記録を質的帰納的に分析することにより、「絵本の読み聞かせ」における学生の学びを明らかにし、学習方法の意義を検討することを目的とした。

II. 方法

1. 絵本の読み聞かせ方法

1) 実習の位置づけ：本学学生は、2年次の小児看護学Ⅰ（30時間・2単位）、3年次の小児看護学Ⅱ（45時間・2単位）を終了後、3年次後期から4年次前期にかけて、5～7名ずつ7グループに分かれ小児看護学実習（135時間・3単位）を行う。小児看護学実習は、病院実習（90時間・2単位）と保育所実習（45時間・1単位）で構成され、保育所実習は、4年次に行っている。また、保育所実習は、オリエンテーションと絵本の読み聞かせ準備：1日、保育所での実習：3日、振り返りカンファレンス：1日の計5日となっている。

2) 絵本の読み聞かせ準備：学生は各自で絵本を選択する。絵本は、受け持ちクラスの年齢を考慮して選択している。その際、教員は発達段階について学生に助言をしている。絵本を選択後、学生は読み聞かせ記録の中の「絵本の名前」「選択理由」「読むときの注意点」「子どもの反応・様子【予想】」を記載する。また、学生1名が読み手、その他の学生（4～6名）が聞き手となって、絵本の読み聞かせロールプレイを行う。聞き手の学生は、読み手の学生が受け持つクラス年齢の子どもの反応を想像し、時には反応しながら聞く。最後に、聞き手の学生から読み手の学生へ、読み聞かせを聞いてどう感じたか、フィードバックが行われる。このロール

プレイでは全員1回ずつ読み手となっている。3) 絵本の読み聞かせの流れ：学生は保育所実習初日に、読む絵本や読み聞かせの時間帯・場所について、クラス担任の保育士へ相談し、助言・指導を受ける。その際、保育士の助言により、クラスの子どもたちの発達段階や読み聞かせの時間帯を考慮し、絵本を選択し直すこともある。そして、概ね保育所実習最終日に、受け持ちクラスの子どもたちを対象に絵本の読み聞かせを実施する。子どもたちの誘導は保育士に依頼しているが、学生自身も可能なところでは行う。可能な学生は、導入として手遊びを行ったあと、絵本の読み聞かせを行う。その後、読み聞かせ記録の「子どもの反応・様子【実際】」と「絵本を読み終えての評価・まとめ」、保育士からの「指導・助言」を記載する。

2. 研究方法

1) 研究デザイン：質的帰納的研究

2) 調査対象：A大学小児看護学実習（保育所実習）を履修した学生40名のうち、研究への同意が得られた35名分を対象とした。

3) 調査期間：2018年12月

4) 調査方法および分析方法：絵本の読み聞かせ後に作成した「絵本の読み聞かせ記録」の「絵本を読み終えての評価・まとめ」の自由記載をデータとし、意味内容の類似性のあるものを分類し、質的帰納的に分析を行った。研究結果の信頼性と妥当性を高めるため、研究過程においては共同研究者間で合議した。

5) 倫理的配慮：対象者へ研究説明書、同意書、同意撤回書を配布したうえで、研究の背景と目的、研究の方法、データの匿名化、研究への参加は自由意志によるものであり不

利益は生じないこと、研究結果の公表、同意後も同意撤回が行える旨を説明した。分析は、成績評価を出したあとに行った。なお、本研究は岡山県立大学倫理委員会の承認を得て実施した。

(承認番号：18-51)

Ⅲ. 結果

1. 受け持った年齢クラスの内訳 (表1)

受け持った年齢クラスと学生数は、0歳児クラス4名、0～1歳混合クラス1名、1歳児クラス2名、2歳児クラス8名(3歳未満：計15名)、3歳児クラス5名、4歳児クラス8名、5歳児クラス7名(3歳以上：計20名)であった。

表1. 受け持った年齢クラス

年齢	学生数	
0歳児	4名	
0～1歳児	1名	3歳未満
1歳児	2名	計15名
2歳児	8名	
3歳児	5名	3歳以上
4歳児	8名	計20名
5歳児	7名	

2. 学生の学び

ことばや表象機能、遊び等の発達は、3歳頃を境に飛躍的に伸びる。そのため、発達段階を考慮し、3歳未満の子どものクラスを受け持った学生と3歳以上の子どものクラスを受け持った学生で区分し分析を行った。分析の結果、3歳未満の子どものクラスを受け持った学生では3カテゴリー、10サブカテゴリーが抽出された。また、3歳以上の子どものクラスを受け持った学生では3カ

テゴリー、11サブカテゴリーが抽出された。

以下、カテゴリーを【 】,サブカテゴリーを< >,生データを「 」で示す。また、筆者が補足した箇所を(),何歳児クラスを担当した学生の生データかを〔 〕で示す。

1) 3歳未満の子どものクラスを受け持った学生の学び (表2)

(1) 【読み聞かせ成功の要因】

学生は「導入で保育士が楽しく手遊びをしてくれたため、(子どもたちは)泣いたり駄々をこねたりすることなく落ち着いた様子で絵本を見ることができた〔0歳児〕」「最後の締めくくりは何を言えばよいのか困っていたときに、保育士がうまくフィードバックしてくれて、終わることができた〔0歳児〕」等、<保育士の援助>によって、読み聞かせが成功したと感じていた。また、「おやつの前、給食の前に絵本を読むという習慣がついていて、皆聞くことができていたので、習慣によって反応することができたと考えられる〔2歳児〕」と、<絵本を読んでもらう習慣>も成功の要因であったと考察していた。さらに、「(選んだ)絵本は『雨の日を楽しくさせる本』であり、読み聞かせの最後に『雨の日が楽しみだね。カエルさんが出てくるかなあ』という声かけをしたのが良かったと考える〔2歳児〕」と、<子どもとの応答を楽しむ>ことも、成功の要因であったと捉えていた。

(2) 【捉えた子どもの反応】

「絵本を読みながら子ども達に問いかけてみたり、子どもが言ったことに対して反

表2. 3歳未満のクラスを受けもった学生の学び

カテゴリー	サブカテゴリー
読み聞かせ成功の要因	保育士の援助 絵本を読んでもらう習慣 子どもとの応答を楽しむ
捉えた子どもの反応	楽しそうな子ども 絵本の世界に入りこむ 絵本への集中が途切れる 絵本に対する反応が薄い 予想外の子どもの反応
より良い読み聞かせに向けて	読み聞かせの方法を考える 発達段階にあった読み聞かせの重要性

応したりすると楽しそうに絵本の読み聞かせを聞いてくれた〔1歳児〕と、学生は絵本の読み聞かせを行いながら、＜楽しそうな子ども＞の姿を捉えていた。また、「子ども達は静かに絵本に集中することができていた〔0歳児〕」「絵の中のいろんなものに興味を示して口々に言ってくれて、絵を楽しんでもらうことができて良かった〔2歳児〕」「(いないいないばあの絵本を読んだあと)昼寝のときに布団でいないいないばあをしてくれた〔0歳児〕」等、＜絵本の世界に入り込む＞子どもの姿を捉えていた。しかし、「絵本を読み始めると、途中で集中が切れてしまっている子もいた〔2歳児〕」と＜絵本への集中が途切れる＞子どもや、「言葉が伝わらず、あまり反応が得られなかった〔0歳児〕」と＜絵本に対する反応が薄い＞子どもも捉えていた。また、「(絵本の読み聞かせの途中に)皆が前に来るとは想像していなかったので驚いた〔2歳児〕」と＜予想外の子どもの反応＞に戸惑っていた。

(3) 【より良い読み聞かせに向けて】

「途中絵本の位置が低く、後ろの子から見えづらくなっていたため、皆に見えるよう意識して持てると良かった〔1歳児〕」「緊張

してペースが速くなってしまった〔0歳児〕」「(選択した絵本は)もっと少人数の時に読むべき絵本だった〔2歳児〕」「『〇〇が食べた!』とイスから立ち上がって教えてくれる子どもが多く、他の子が、絵本が見えない状況になってしまったため、絵本を読み始める前に、イスに座ったまま聞くように声かけをすることが必要だった〔2歳児〕」「抑揚をつけたり、高い声で言ったりすることで、表情が和らぐ子どもがいた〔0歳児〕」「保育士が誘導してくれたように、ぬいぐるみを使って実際にいないいないばあを実施したり、自分で実施してから読むと、もう少し関心が寄せられたのではないかと〔0歳児〕」等、子どもの特性に応じてどのように読み聞かせを実施すれば良かったかと＜読み聞かせの方法を考える＞機会となっていた。また、「月齢の低い子どもでも理解できる絵本を選択したことによって、皆が絵本に集中することができた〔2歳児〕」「読み聞かせは保育士と相談して、子ども達のなるべくストレスにならないようにいつも読み聞かせを行っているそのタイミングで行うようにした〔0歳児〕」と、＜発達段階にあった読み聞かせの重要性＞を考察していた。

2) 3歳以上の子どものクラスを受け持った学生の学び(表3)

(1) 【読み聞かせ成功の要因】

学生は、3歳未満の子どもを受け持った学生と同様に、「保育士が、園児が集中できるように手遊びをし、注目を集めてくれたため、園児たちは絵本に集中することができた[4歳児]」といった<保育士の援助>や、「(絵本の読み聞かせが)毎日の習慣となっていたため、きちんと座り、黙って絵本を聞く用意ができていたのだと考えた[3歳児]」といった<絵本を読んでもらう習慣>、「子ども達が『先生、見えるよー』と教えてくれ、安心して読むことができた[4歳児]」といった<子どもとの応答を楽しむ>ことが、成功の要因であると考えていた。また、3歳未満の子どもをクラスを受け持った学生では記述がなかった、「自分の最初の呼びかけによって、子どもは読み聞かせに興味をもち、前のめりになって、集中することができた[3歳児]」と<自分が実施した導入の効果>や、「みんなと関係を築くことができ、(子どもたちが)私を覚えてくれたことも、読み聞かせができた要因である[3歳児]」と<子どもとの信頼関係>が成功の要因であるとも感じていた。

(2) 【捉えた子どもの反応】

学生は、「子どもの発言は絵本に対するものであり、話の内容に興味をもて、楽しめていた[3歳児]」等、<楽しそうな子ども>の姿や、「一緒に数をかぞえることによって、絵本の世界に入ったような気分になり、黙って集中して聞けていた[3歳児]」「絵が右ページ、文字が左ページに分かれていたため、右ページの衝撃的な絵を楽しんで見て

くれた[4歳児]」「終わったあとには、(絵本の中に出てきた)盲目のことに對し興味を示す様子があった[5歳児]」と、<絵本の世界に入り込む>子どもの姿を捉えていた。また、「集中力が途切れた子もいた[4歳児]」と<絵本への集中が途切れる>子どもの姿や、『この動物は何ていう動物かな?』と問いかけようと考えていたが、実際は、子ども達の方が先にどんな動物が次は来るのかと予想していた[4歳児]」と<予想外の子どもの反応>を捉えていた。これらは3歳未満の子どもを受け持った学生と同様であった。しかし、3歳未満の子どもを受け持った学生で捉えられた<絵本に対する反応が薄い>子どもの姿については記述がなかった。

(3) 【より良い読み聞かせに向けて】

「読み聞かせを始める前に子ども達全員に絵本の見え方の確認ができていなかったため、確認をして全員がしっかり見えるようにしてから始めるべきだった[4歳児]」「余韻を残すためにも、絵本を読み終えてからも、遠足やお弁当についての話をしたら良かった[4歳児]」「少し速くなってしまったかもしれないので、読む速さや、ページをめくる速さをもう少しゆっくりしてみようと思う[5歳児]」等、絵本の読み聞かせは、3歳未満の子どもをクラスを受け持った学生と同様に<読み聞かせの方法を考える>機会となっていた。しかし、3歳以上の子どもは、読み聞かせ中に立ち上がるものがなかったため、立ち上がる子どもに対するかわりについての記述はなかった。また3歳未満の子どもをクラスを受け持った学生と同様に、「文字数がもう少し多くても

表3. 3歳以上のクラスを受け持った学生の学び

カテゴリー	サブカテゴリー
読み聞かせ成功の要因	保育士の援助 絵本を読んでもらう習慣 子どもとの応答を楽しむ 自分が実施した導入の効果 子どもとの信頼関係
捉えた子どもの反応	楽しそうな子ども 絵本の世界に入りこむ 絵本への集中が途切れる 予想外の子どもの反応
より良い読み聞かせに向けて	読み聞かせの方法を考える 発達段階にあった読み聞かせの重要性

4歳なら理解できる〔4歳児〕とく発達段階にあった読み聞かせの重要性>について考察していたが、3歳未満の子どものクラスを受け持った学生では記述があった、「子どもに合わせた読み聞かせの時間設定」については、記述がなかった。

IV. 考察

1. 学生の学び

今回、発達段階を考慮し、3歳未満の子どものクラスを受け持った学生と3歳以上の子どものクラスを受け持った学生で区分し、分析を行った。その結果、【読み聞かせ成功の要因】【捉えた子どもの反応】【より良い読み聞かせに向けて】の3カテゴリーが共通して抽出された。しかし、サブカテゴリーは、2つの群で違いが見られた。

【読み聞かせ成功の要因】では、3歳未満の子どものクラスを受け持った学生は、保育士の援助と子どもの絵本を読んでもらう習慣によって、読み聞かせが成功したと捉えていた。3歳未満の子どもは保育士等の存在によって、次第に保育所の生活に慣れ、楽しく充実した生活や遊びの中で、周囲の人との関わりを深めていく（厚生労働省、

2017)。学生が絵本の読み聞かせを行うのは概ね実習最終日の3日目である。その間、学生は子どもとかかわっているが、信頼関係は未熟である。さらに、言語の獲得に関しては、3歳頃より語彙が800から2000語まで増え、4～5歳になると概念の獲得がさらに進む（雪松、2018）。3歳未満の子どもでは語彙力が乏しいため、言語的コミュニケーションに慣れている学生にとっては、非言語的コミュニケーションが多い3歳未満の子どもとのかかわりに戸惑いを感じていると考えられる。また、3歳未満の子どもは集中できる時間が短いうえ、次々と興味の対象が移って行く。そのため、自分だけでは子どもをひきつけておくことが難しいと学生は感じていたのではないだろうか。子どもが信頼する保育士の援助があったからこそ、また絵本を読み聞かせるという習慣があったからこそ、絵本の読み聞かせが成功したと学生が捉えたのは当然であろう。3歳以上の子どものクラスを受け持った学生も、保育士の援助や習慣によって、絵本の読み聞かせが成功したと考えていた。しかし、それに加えて学生自身が実施した導入により、絵本の読み聞かせが成功したとも捉え

ていた。さらに、子どもとの信頼関係が成功の要因であると捉えた学生もいた。3歳以上の子どもは集中できる時間も増え、「絵本は座って聞く」などのルールを守ることができるようになってくる。また、好奇心も旺盛であり、学生に対しても多くの関心を寄せてくれる。語彙力も増え、4～5歳になると、会話の中で相手の反応を察知し、相手の気持ちや理解度を推し量りながら自分の発言内容や態度を調整する「語用能力」の獲得も進む（雪松，2018）ため、言語的コミュニケーションが成立する。そのような子どもの姿から、「学生自身が実施した導入によって子どもをひきつけることができた」「子どもとの信頼関係が形成できたため、読み聞かせが成功した」と学生は捉え、自信につながったのではないかと考えられる。

【捉えた子どもの反応】では、3歳未満の子どものクラスを受け持った学生も3歳以上の子どものクラスを受け持った学生も、絵本の世界に入り込む子どもの姿を捉えていた。しかし、3歳未満の子どもを受け持った学生で捉えられた「絵本に対する反応が薄い子ども」の姿については、3歳以上の子どものクラスを受け持った学生では記述がなかった。これは、3歳以上では集中力と好奇心、また自分の思いを表出できる力が培われてくるため、子どもの絵本に対する反応を3歳未満の子どもより捉えやすくなっていたためではないかと考えられる。

【より良い読み聞かせに向けて】では、3歳未満の子どものクラスを受け持った学生も3歳以上の子どものクラスを受け持った学生も、絵本の読み聞かせを通して、「絵本の持ち方には注意が必要」「声の大きさを工夫する」「読み方を工夫する」など絵本の読

み聞かせ技術について難しく感じており、今後読むときには、そのような工夫が必要であると考察していた。山田は、絵本の読み聞かせを体験した保育学生の感想を分析し、「全員の子どもが見やすいように、持ち方や座り方を工夫することや絵本の読み方、間の取り方や声の出し方など技術的な面での難しさを感じている学生が多かった」と報告しており（山田,2017）、今回分析した看護学生も同様であると言える。また「読み聞かせ前の導入の重要性を知る」「絵本の選択を考える」「読み終えた後のかかわりを考える」等、絵本の読み聞かせの前後のかかわりについても考察しており、ただ絵本を読めば良いというものではない、子どもの特性に応じた絵本の読み聞かせの難しさと奥深さを感じていたと考えられる。3歳未満の子どものクラスを受け持った学生と3歳以上の子どものクラスを受け持った学生のサブカテゴリー内の内容の違いは、「立ち上がる子どもに対するかかわり」と「読み聞かせの時間設定」であった。これらは、3歳未満のクラスを受け持った学生のみ記述していた。3歳以上になると、前述したように「絵本は座って聞く」などのルールを守ることができるようになってくるため、立ち上がる子どもはいなかったことが理由として考えられる。また、3歳未満の子どもは集中できる時間が短く、集中が途切れたら興味関心のある方へ意識を向ける。その姿を捉えた学生が、集中できる時間を設定して、その時間内で読める本を選ぶ必要があると考察したと考えられる。

2. 「絵本の読み聞かせ」の意義と今後の課題

学生は絵本の読み聞かせを通して、子どものかかわり方を学び、子どもの理解を深めることができたと考えられる。しかし、それと同時に、読み聞かせの技術的な難しさも感じていた。山田は読み聞かせの技術について「実習前の授業の中で実践的に学ぶ必要がある」と述べている（山田,2017）。現在、実習前に学内で絵本の読み聞かせロールプレイを実施しているが、もっと聞き手の聞く場所を広くとる等、保育の現場に近い場を設定する工夫が必要と考えられる。また、子どもの反応・様子について予想を記述させているが、子どもとかかわる機会の少ない学生にとって、いろいろな子どもの姿を想像することは難しく、子どもは自分の期待通りに反応してくれると考えている学生が多い。そのため、期待していた反応と異なる子どもの姿を捉えたときに、戸惑いを感じている。学生の子どものイメージを膨らませると同時に、そういった子どもに対してどのようにかかわるかまで考えるよう指導することが必要であり、今後の課題である。

V. まとめ

小児看護学実習（保育所実習）で導入している「絵本の読み聞かせ」後の記録を3歳未満の子どものクラスを受け持った学生と3歳以上の子どものクラスを受け持った学生で区分し分析した結果、【読み聞かせ成功の要因】【捉えた子どもの反応】【より良い読み聞かせに向けて】の3カテゴリーが共通して抽出された。これらの結果より、学生は「絵本の読み聞かせ」を通して、難しさを感じながらも読み聞かせを成功体験として捉えていること、読み聞かせを行いながら子

どもの反応をしっかり捉えていること、子どもの特性に応じた読み聞かせを行うにはどうすれば良いかを考察していることが明らかになった。

付記

調査にご協力くださいました皆様に、深く感謝申し上げます。

文献

原嶋朝子他（2005）看護学生の絵本作りと読み聞かせの自己評価，日本看護学会論文集：看護教育 36, 344 - 346.

厚生労働省（2018）保育所保育指針解説.

[https://www.mhlw.go.jp/file/06-](https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000202211.pdf)

[Seisakujouhou-11900000-](https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000202211.pdf)

[Koyoukintoujidoukateikyoku/000020221](https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000202211.pdf)

[1.pdf](https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000202211.pdf) 2月6日最終アクセス

中嶋一恵他（2005）小児看護学初学者が子どもに抱くイメージの構造，県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要 6：49 - 58.

大澤早苗（2006）「絵本の読み聞かせ」を小児看護技術演習に取り入れた有効性，日本看護学会論文集：小児看護 36, 134 - 136.

山田秀江（2017）「絵本の読み聞かせ」に関する一考察 ―学生の読み聞かせ体験の実態調査より―，四篠啜学園短期大学紀要 50, 38 - 47.

雪松美智子（2018）幼児期の子どもの成長発達と看護，小児の発達と看護 第5版 中野綾美編，メディカ出版，102.

Student's Learning on 'Reading Picture Books' in Pediatric Nursing Practice (Nursery Practice)

YUKO AMINO, KATSUKO OKIMOTO

Faculty of Health and Welfare Science Department of Nursing

Abstract

To clarify the details of students' learning through picture-book reading as part of pediatric nursing training (at nursery schools), and discuss training methods for more effective learning, we qualitatively and inductively analyzed their records created after such reading. Through analysis, with students divided into 2 groups based on the developmental stage: those in charge of children younger than 3 and those in charge of children aged 3 or older, 3 categories were created for both groups: [factors contributing to successful reading], [observation of children's reactions and responses], and [future perspectives for better reading]. The results revealed that students perceived that their picture-book reading had been difficult, but successful. While reading, they carefully observed children's reactions. They also considered measures to improve their reading in the future.

Key words

Reading Picture Books, Pediatric Nursing Practice, Nursery Practice, Nursing Student, Learning